

府中市美術館運営協議会答申（案）

1 諮問事項 地域に愛される府中市美術館の運営について

2 答申（案）

（2度の審議における意見、要望などをピックアップしてトピックごとにまとめました。）

（1）開館10周年を振り返って

□今回の10周年記念展で、新聞折り込みの中にチラシを入れたことは市内全域に行きわたる方法としては、とてもよかった。また、美術館の中に他館のポスターやチラシがあるのがよい。個人的には、武蔵野のゆかりのある風景の展覧会でとても素晴らしかった。今後もこのような収集方針を続けてほしい。

□2000年開館以来、府中市美術館は足腰の強い美術館であるように認識している。学芸員や職員だけでなく、市民の中にある程度美意識が育っていると感じている。ただ、この10年間の活動は充実しているが、開館10年目までは上り坂であり、次の10年が正念場となってくる。次の10年への指針・方針を一つずつ具体的なものにしていきたい。

□アートサイト生きる力がよかった。いろいろなところで美術館と関連するものがみられて美術館を身近に感じた。

（2）地域に愛される美術館

□（地域と美術館との）共存とは、市民の要望を全て受け入れるだけでなく、素晴らしいものがあるということをも美術館からも発信していく必要があると思う。

□出前講座をやってもらえれば市の中心部だけでなく府中市全体の人に美術館の楽しさが伝わり足を運んでもらえるようになると思う。

（3）地域とのネットワーク

□府中市美術館に足を運ぶ人の輪が広がればよい。人からのアプローチ、また、地域ぐるみで駅からの導線を確保することが望ましいが、美術館単体ではむずかしいと思われる。各学校の先生方に声かけしてもらい、「学びのパスポート」を利用して友だち同志でぜひ美術館にきてもらいたい。さらには、土日に関を巻き込むような体験できる、体感できる美術館のしかけを考えてほしい。

□府中市は豊かな市である。特に図書館は蔵書数も多く、利用者も多い。これからの10年は、このような優れた施設を連動させられるような企画を考えてみてはどうか。

□府中市の中央図書館は蔵書も多く、内容も素晴らしいので、利用客も多い。美術館の特集コーナーを作ってもらえるなどして、活用したらよいのではないか。

□小学校の校長も教員も自分で足を運んでみてもっと宣伝しなければいけないとすごく感じたし、パンフレットを配るだけでなく人から人へことばでつながっていくような宣伝をしなければいけないと思った。

また、学芸員にも足をはこんでもらって、出前講座もできますということをもっと宣伝してもらいたい。

□少しずつでも外に出て行くということはよいことだし、若い作家をとりいれていくのは非常に重要だと思う。

(4) 学芸員の企画力と地域

□私立美術館はお金もかけられるし、個性的で良いと思うが、公立美術館はお金もかけられないし、いろいろ批判がでるので個性的にはできないと思う。ただ、全体としてバランスがとれていれば、一つ一つの展覧会についてはもっと個性をだしてもいいのではないか。そのほうが面白い美術館になると思う。また、市立の美術館としては学芸員にもっと外へ出て行ってほしいと思う。この2点が美術館の活性化につながると思う。

□企画力というか専門スタッフの資質を発揮してもらおうということ、それが他の文化施設と違うところだと思う。また、文化センター等に人が行って話をしてくれるというだけでも美術館を身近に感じてもらえると思う。

□昔のマンガの原画展に行ってきたが、とっても盛況だった。美術館って楽しいところだと思ってもらうきっかけ作りということではマンガというのもいいのではと思った。

(5) デジタル化の趨勢と対応

□美術館もデジタル教材化してほしい。韓国、シンガポール、イギリスに比べて日本は遅れている。デジタル教材化することによって、攻めの普及活動ができるのではないか。情報を外へ飛ばしたり、戻したり、情報は各方面に飛んでいき、さらに双方向に行きかうようになる。様々な課題があるが、戦略として美術館もデジタル教材化を進めてほしい。

□情報のデジタル化は避けて通れないことなので、早急に取り組む必要があると思う。次に「彫刻のあるまちふちゅう」に関連して、市内をめぐるツアーなどを企画してみたらどうか。

□今の若い人の傾向として、本や活字よりもツイッター、マンガに興味を持つ。デジタル化することにより集客力はあがる。

□今の時代背景を一つの流れと認めた上で、来てもらうためにはデジタル化の充実が必要。府中市のホームページを時々みるが、どこも同じで楽しさ感が少ない。より工夫をして柔軟性を持たせた方がいい。

(6) 広報について

□もう少し美術館としてポイントをしばった企画展、ポスターや広報のあり方を考えたらどうか。おもしろいものややっている、変わった企画がおもしろいなど、ポイントをしばった企画展を考えてもらいたい。

□広報について、今回のバルビゾン展はちゅうバス車内にはポスターがあったが、京王線車内のポスターがなかったように思う。通勤・通学客に向けて「行ってみようかな」と思わせるには、車内ポスターは効果的だと思う。また、携帯画面やインターネットを取り入れた広報は、若い人向けの啓蒙になる。

□広報において大切なのは、定点を決めること。そして、展覧会に合わせて柔軟性を持たせることにある。学芸員は個人の経験にとどめず、組織として広報を共有して行くべきである。

□京王線のドアステッカーや、ちゅうバスのちらしなどがとてもいいと思う。

(7) 教育普及活動と子どもたち

□気軽に足を運べる美術館があり、府中の子どもたちは恵まれている。生徒たちにとって、敷居の低い、授業ではできない様々な経験を実際に体験できる美術館であってほしい。

□学芸員の子どもたちへの働きかけがとても素晴らしい。鑑賞教室は美術館でのマナー、絵の見方、鑑賞

の方法などとても勉強になるので、ぜひ続けてほしい。学びのパスポートを活用することによって、美術作品を親子で鑑賞できるよい機会となる。感性を磨くことのできる美術館となってほしい。

□「学び」ということに関して、これからの子どもたちを美術館に結びつける、子どもたちが考えているアートを引き出してあげるためにも頑張っていきたい。

□生徒が生徒による誘導をする。ジュニアリーダー等の活用も考えてみたらどうか。

□教育的立場からいうと効率とはお金の数値を減らしていくことではなく、美術館の目的を達成するために子どもが美術館に足を運ぶことではないかと思う。会議の前にぱれたんの会場にいったみたが、ふだんと違って子ども達の声が出ていて民間の美術館ではありえない雰囲気、これが公立美術館なのだろうなと思った。私も子ども達と一緒にデジタル掛け軸というものをやってみたが、そばにいた方が褒めてくれて大変うれしく思った。これが子どもだったらさらに「美術館って楽しいな」と思ってくれたのではないかな。「今年の夏休みは美術館にいったほめられたよ」というような言葉が返ってくるような美術館になれば将来その子が親になってまた子どもを連れて美術館に来ることになり、経済的・数字的効率ではなくて美術館の目的を達成したことになるのではないかと思った。

(8) 居心地、ホスピタリティ、食、アクセスなど

□美術館に来ていただいて、気持ちよくこの空間を共有できるように、たとえば、食事をして満足して帰るといように「食」にも注目してみたらどうか。

□食べ物については、美しいものに接したい、おいしいものを食べたいというのは人間として根本的な欲求といえる。今後、愛される美術館としての一つのキーワードになると思う。

(9) 行財政改革（指定管理者制度）について

①（導入に肯定的）

□島根県立美術館では宍道湖の日没を観光客に見せるために閉館時間を日没にあわせて変更しているということで、来館者サービスという点でいかに民間ということをやっているかという評判がよい。

□市民の立場からいうと市が運営しているのか指定管理者がやっているのかはあまりかわりがないように思われるが、民間のノウハウを取り入れればサービス面で良くなるのだろうとは思っている。

□学芸員には府中市の誇りとなるような美術をきちんと守ってもらいたいし、市民のための企画を頑張ってもらいたいので、きちんと市で管理してもらいたいと思うが、すでに委託している部分については指定管理者でもできるのではないかな。さらに目的を明確にすればサービス向上が図れるのではないかなと思う。

②（導入に否定的）

□指定管理者制度は民間のノウハウを導入することが目的であってその結果として合理化されて経費が削減されることがあるかもしれないが、指定管理者制度になれば合理化され経費が安くすむとそれだけを信じてそれを目的にするようでは大きな間違いをおこしてしまう。

□文化施設の中でも一番指定管理者制度の導入がむずかしいのが美術館だと思う。体育施設にしても公会堂にしても日本の場合には基本的には場所貸し施設なのだが、美術館というのは所蔵品というものを持っていて、これを永続的にきちりと管理していかなければならない。また貸しギャラリーではないので美術館の側で展示内容を企画しなければならないのでその人材が必要となる。学芸員に関していえば、美術的というか学術的だけでなく美術品を扱う以上人間的な関係もでてくるのでそこに永続性が必要となる。

□指定管理者になったところがさらに業者に委託する場合、入札の必要はない。指定管理者が自由に選ぶ

ことができるので、入札によって毎年警備会社が替わるなどということがさけられる。ただ問題は数年後に指定管理者自体が替わってしまった場合、すべてがガラッと変わってしまう可能性があるということだ。学芸的部門まで替わってしまうと非常に大きな影響がでてくることになる。

□体育館やプールなら運営方法を変えることにより収益をかなりあげることができるが、美術館や博物館などは儲かるところではないので、任されたほうがこんなに採算が合わないところは運営できないと投げ出したところがある。

□運営自体に民間のノウハウを導入するのが目的であれば、ノウハウだけを買うとか貰うとかするだけで本体は今のまま直営でいいと思う。

□日本の美術館は基本的には学芸部門と事務部門しかなく施設管理部門などについてはすでに委託に出しているし、大きな展覧会などではマネージメント部門は大きな新聞社がはいってきたりしてある程度柔軟性をもってやってきている。その中でいかに改善していくのかをまず考えた方が能率的というか有効だと思う。指定管理者制度の場合、数年後にプロポーザル方式で管理者が替わってしまった場合、その社員は仕事なくなってしまうわけで、学芸員がかわってしまうとなると、継続性がなくなり、他の美術館との信頼関係が失われてしまう。島根美術館の場合それがわかっていたので学芸部門あるいは管理職に関しては県の職員を残した。こういった成功した例を見習いながら模索するという選択肢もあると思うが、今早急に指定管理にする必要はないと思う。視野に入れる必要はあるかもしれないが、今のやり方で改善できるはずだ。それが地域に愛される美術館の運営につながっていくと思う。

□美術館に関していえば私は指定管理者制度にはなじまないと思う。すでに管理運営という場面では入札制度が導入されているし、経費的な面でも最大限努力がなされていると思うので、この部分で指定管理者制度を導入したからといって必ずしも現在の財政状況が好転するとは思わない。そういう点で美術館を指定管理者制度のもとに置くというのには疑問を持っているけれども、このまま美術館の運営を検証しないでいいというわけではない。

③（中間的意見）

□考え方としては全て直営、学芸部門など一部直営、全て指定管理者という3つのパターンに分かれると思う。今現在も一部委託という形で民間がはいっているが、仕様書によるものなので民間のノウハウが生かしきれていないと言えるかもしれない。

④内部検証（自己検証）と外部評価の重要性

□自己検証というのは膨大な資料を作らなければならず膨大な時間がかかるだけであまり意味がないので外部的に意見を徴集する機会を設定する方が良いと思う。

□効率的というのは経費を節減することだけではなくてその美術館に行ったら気持ちよかったと感じてもらいたいと思う。

□指定管理者制度をはずれるメリットとして、学芸部門を中心とした企画、運営、収集、保存管理の継続性が保障される。これはまさに重要なことだと思うが、同時に継続することによりマンネリ化をひきおこしかねない。そこで、企画はどうか収集活動はどうかと検討する必要がある。それはこの運営会議の役割の一つだと思う。何らかの検討する場を設けるということを条件に私は指定管理者制度とはちがう場所に美術館を置くかたちがありえると思う。